

Working Paper Series (J)

No.40

孤独な富裕層：豊かになっても仲間に恵まれない人たちの心の裡

Lonely wealthy people:
the happiness of those who have few friends even if they get rich

石田光規
Mitsunori ISHIDA

2021年01月
http://www.ipss.go.jp/publication/j/WP/IPSS_WPJ40.pdf



国立社会保障・人口問題研究所

〒100-0011 東京都千代田区内幸町 2-2-3 日比谷国際ビル 6階

<http://www.ipss.go.jp>

本ワーキング・ペーパーの内容は全て執筆者の個人的見解であり、国立社会保障・人口問題研究所の見解を示すものではありません。

孤独な富裕層：豊かになっても仲間に恵まれない人たちの心の裡

早稲田大学文学学術院 石田光規

1 はじめに

「幸せになる」という目標は、おおよそすべての人びとが生涯をつうじて追い求める。かつて、経済的な豊かさを幸福の増進ととらえてきた時期もあった。しかし、ローマ・クラブが、経済成長のひずみを「成長の限界」として指摘した 1970 年代前半から (Meadows et al. 1972=1972)、経済的豊かさと幸福の複雑な関係が指摘されるようになった。すなわち、国家の経済成長と国民の幸福感は、かならずしも線形な関連をもたず、その現象は「幸福のパラドックス」として人口に膾炙している (Easterlin 1974)。

幸福のパラドックスは、GDP に代表される国の経済指標と、当該国の国民の平均的な幸福度との関連のように、どちらかという、マクロの指標を対象に論じられてきた。他方、ミクロな質問紙調査の分析でも、経済的な豊かさと幸福度の関連は、複雑であると指摘されている。本論文では、経済的な豊かさと幸福の関連について、人間関係の要素を絡めながら分析してゆく。具体的には、人びとの経済的豊かさと幸福との関連に、親しい関係の欠損が及ぼす影響を検討する。

2 先行研究

2-1 経済的豊かさと幸福の関連

経済的豊かさと幸福との関連については、マクロな分析、ミクロな分析いずれにおいても、飽和点仮説と相対所得仮説から説明されている。ここでは、ミクロなデータの分析に限定して、簡単にまとめておこう。

飽和点仮説は、所得が一定水準に達すると、所得上昇による幸福増進効果がみられなくなる、というものだ。たとえば、日本では等価所得 700 万円をいどで飽和に達すると指摘されている (筒井 2010)。さまざまな先行研究をまとめた大石 (2009) は、欧米でも、年収と人生の満足度との相関は 0.10~0.20 にとどまることを指摘している。

一方、相対所得仮説は、所得と幸福度との関連は、自らが準拠する集団との比較により規定されると考える。浦川・松浦 (2007) は、学歴、出生年コーホート、居住地域、婚姻状況の類似する集団を「類似集団」と定め、若年女性を対象に、本人の世帯収入と類似集団の世帯収入の格差から、彼女たちの相対所得を算出し、生活満足との関連を検討した。その結果、若年の有配偶女性の生活満足には、相対所得が有意な規定力を持ち、類似集団に比して高い収入を得ている女性ほど生活満足度が高かった。

また、脇田 (2017) は、郊外の調査から、諸個人の生活満足度が、当該個人の住む地区の平均収入、および、地区の平均収入と諸個人の世帯収入の差分 (相対所得) の影響を受けることを明らかにした。以上の知見から、人びとの経済的豊かさと幸福感の関連に対しては、準拠集団との比較による相対所得が影響していると言えよう。

2-2 人間関係の効果および経済的豊かさとの関連

さて、幸福感に対しては、経済的豊かさ以外にも、さまざまな要素が影響する。なかでも、とりわけ強い規定力をもつと指摘されているのが、人間関係である。幸福度研究の現状をまとめた浦川（2011）は、家族・結婚が幸福感や満足に強く影響することを指摘している。

浦川の指摘のみならず、人間関係が幸福感の一要素である精神的安寧に強く影響すると指摘した研究は多い。その一例として、人びとのサポートのストレス軽減効果を指摘したソーシャル・サポート研究（浦 1992）や、関係からの切断による負の影響を指摘した孤立・孤独研究（Cacioppo and Patrick 2008=2010）があげられる。

この人間関係の効果に着目して、経済的豊かさと幸福感の非線形的な関係を説明しようとする研究もいくつかある。先に述べた浦川（2011）は、『社会生活基本調査』を用いて、経済的豊かさと関係性の交互作用効果を検討した。具体的には、調査対象を世帯所得の多寡（貧困層と非貧困層）、家族との交流の多寡（月1回超と月1回以下）別に4グループに分けて、それぞれの生活満足度を比較した。その結果、貧困層であっても、家族との交流があるグループは、非貧困層で家族との交流がないグループよりも生活満足度が高い、という事実を発見した。ここから浦川は、「家族との結びつきは生活満足度や相対的な剥奪感と関連性が強い」（2011: 9）と述べている。

また、古里・佐藤（2014）は、関東甲信越の50市区町村での調査から「経済格差の大きい地域においては、剥奪感による主観的幸福への影響を、橋渡し型ソーシャル・キャピタルの一形態とも言える趣味娯楽組織への所属によって回避できると考えられる」（2014: 203）と述べている。その要諦は以下の通りである。格差の大きい地域では、低所得者の相対的な所得が下がる。それゆえ、幸福感も低下すると考えられる。しかしながら、趣味娯楽組織に所属することで、低所得者の幸福感の低下は抑制される、ということだ。

2-3 本研究の着眼点

ここでいったん、これまでの研究結果をまとめよう。先行研究から、経済的な豊かさと幸福感の間には線的な関連はみられない。人びとはむしろ、準拠集団と比較した所得の多寡（相対所得）から、経済的豊かさと幸福を関連づける。また、相対的に所得が低い層であっても、何らかの関係性をもつことによって、幸福感の下落効果は抑制される。ここから、経済的豊かさと人間関係は、相互に関連しつつ、幸福感に影響を与えていると考えられる。

本論文では、経済的豊かさと人間関係が幸福感におよぼす影響について、人間関係の剥奪、すなわち、欠損の面から検討していく。以下、本稿の着眼点をまとめよう。

先行研究でも確認されたように、人間関係には、相対的に所得が低い層の幸福感の下落を抑制する緩衝効果がある。この研究は、人間関係のプラスの側面に着目したものと言える。しかしながら、誰しもが安定した人間関係を築けるわけではない。カシオポとパトリック（2008=2010）が示したように、人間関係の欠損は、心身にさまざまな負の影響を及ぼす。なかには、『友だちの数で寿命はきまる』（石川 2014）といったやや過激な言説もみられる。

本論文では、親しい人間関係の喪失が、経済的な豊かさと幸福との関連に与える影響について検討する。具体的には、親しい関係の欠損が、平均的なレベルからみて、経済的に恵まれない人、豊かな人、それぞれにマイナスの影響を及ぼす、という視座から分析を行う。以

下、それぞれの仮説を提示しよう。

まず、経済的に恵まれない人である。経済的に恵まれないこと、人間関係に恵まれないことは、それぞれに、幸福感にマイナスの影響を与える。この二つの事態の重複は、負の相乗効果を生み、当該個人の幸福感をよりいっそう下落させると考えられる。本論文では、経済的な貧しさと関係性の貧しさが重なったことにより現れる幸福感の低下を、関係性と貧しさの負の相乗効果として分析してゆく。

次に、経済的に豊かな人である。相対所得仮説にしたがえば、人びとは自らの経済レベルを、準拠集団との比較をつうじて判定する。それゆえ、経済的な豊かさの獲得は、かならずしも諸個人の幸福の増幅に寄与するわけではない。本論文では、この相対所得仮説から、一步議論を進め、所得以外の剥奪要因を検討する。具体的には、経済的に豊かな人ほど、人間関係の剥奪による幸福感の減退が大きいという仮説を検討する。

経済的に豊かな人は、貨幣の消費をつうじて、さまざまな物品やサービスを利用できるようになり、人生における選択肢が増す。選択肢の増加は、人びとの欲求充足への期待感を高進させる。他方、このような状況での剥奪——欲求の不充足——は、彼・彼女らに大きな失望をもたらし、幸福感を減退させる。これを本論文の主旨に照らせば、経済的に豊かになったにもかかわらず、親しくする人もいない状況は、当該個人に大きな落胆をもたらすと考えられる。この仮説は、豊かさのなかでの自殺を扱ったデュルケーム (Durkheim 1960=1980) のアノミー効果と論拠を同じくする。そこで、経済的に豊かな人の、人間関係の剥奪によるマイナスの効果を、アノミー効果としておこう。

第4節以降では、記述統計および多変量解析から、関係性と貧しさの負の相乗効果、アノミー効果について検討してゆく。

3 データと変数

3-1 データ

本研究は、国立社会保障・人口問題研究所が2017年に実施した『生活と支え合いに関する調査』データを利用する。この調査は「厚生労働省が実施する「平成29年国民生活基礎調査」で全国を対象に設定された調査地区(1,106地区)内から無作為に選ばれた調査地区(300地区)内に居住する世帯主および18歳以上の個人を対象として平成29年7月1日現在の世帯の状況(世帯票)および個人の状況(個人票)について調べたものである」(国立社会保障・人口問題研究所 2017:1)。

調査方法は配票自計、密封回収方式である。有効回収数・有効回収率は、世帯票が10,369・63.5%、個人票が19,800・75.0%である。分析のさいには世帯票と個人票を合併して使用した。

3-2 おもな変数

幸福度については、幸福感、生活満足度などさまざまな指標があるⁱ。また、直接的に幸福感や生活満足度を尋ねる質問のみならず、健康、とくにメンタルヘルスの悪化も代替指標として用いられている(近藤 2010)。本論文では、諸個人のメンタルヘルスの悪さを、彼・彼女らの不幸福感を表す指標として用いる。

幸福感ではなく、不幸福感を変数として用いる理由は以下の通りである。本論文は、経済的豊かさ・貧困と人間関係の欠損が相まって、諸個人にいつその心的剥奪をもたらす、という視座に立つ。したがって、諸個人の幸福がどの程度減退するかよりも、不幸福感がどの程度高まるかという分析の方が目的に沿いやすい。気分の沈み込みや絶望感などのメンタルヘルスの悪化は、人びとの不幸福感を表すと考えられる。そこで、本論文では、メンタルヘルスの悪さを不幸福感の指標とした。

操作化にあたっては、調査の1ヶ月前(6月)の気持ちについて、尋ねた質問を用いる。この質問は、6つの項目で鬱や不安傾向を尋ねており、K6として知られている。本論文では、このなかでも、不幸福感を直接的に表すと考えられる「気分が沈み込んで、何が起ころうとも気が晴れないように感じた」という質問への回答を用いた。回答者は、前掲の文章に対して、1「いつも」2「たいてい」3「ときどき」4「少しだけ」5「まったくない」の選択肢のなかから、択一式で回答する。クロス集計のさいには、このカテゴリーをそのまま用い、多変量解析のさいには、1「いつも」2「たいてい」を1、それ以外を0としたダミー変数を用いた。

経済的豊かさは、現在の暮らし向きについて特定した質問を用いる。この質問は、現在の暮らし向きについて、1「大変ゆとりがある」2「ややゆとりがある」3「普通」4「やや苦しい」5「大変苦しい」のなかから択一式で選ぶ方式をとっている。分析のさいには、1と2を合併して「経済的に豊かな層」、4と5を合併して「経済的に恵まれない層」とした。「普通」については、そのまま用いている。多変量解析のさいには、普通を基準カテゴリーとして、豊かな層と恵まれない層のダミー変数を作成した。

親しい人間関係の有無については、頼れる人の有無を尋ねた質問のなかの、「喜びや悲しみを分かち合うこと」の項目を用いる。頼れる人の有無の質問は、9つの項目に対して、1「いる」2「いない」3「そのことでは人に頼らない」のなかから択一式で選ぶ方式をとっている。本論文では、9項目のなかで親しさと密接な関わりをもつと考えられる「喜びや悲しみを分かち合うこと」の回答を用いた。

表1は各変数の度数分布である。「気分が沈み込んで、何が起ころうとも気が晴れないように感じた」という項目については、「まったくない」人が半数弱(46.9%)である。「いつも」または「たいてい」感じた人は、6%であり、全体のなかでもかなり少ないことが分かる。「暮らし向き」については、豊かな層が11.1%、ふつうが54.9%、恵まれない層が34%と、「ふつう」を除くと、やや「恵まれない」側が多い。「喜び悲しみを分かち合う」相手については、「いない」人が5.4%、「頼らない」人が3.1%であり、大半の人が、少なくとも一人は喜び悲しみを分かち合う相手を確保している。

表 1 各変数の度数分布

		度数	有効%			度数	有効%
気分が沈んで何が起こっても気が晴れない	いつも	425	2.3	暮らし向き	豊かな層	2021	11.1
	たいてい	680	3.7		ふつう	9974	54.9
	ときどき	3080	16.9		恵まれない層	6189	34
	少しだけ	5506	30.1		合計	18184	100
	まったくない	8572	46.9				
合計	18263	100					
				喜び、悲しみを分かち合う	いる	15766	91.6
					いない	923	5.4
					頼らない	531	3.1
					合計	17220	100

3-3 その他の変数

浦川（2011）によれば、幸福は、健康、学歴、所得、家族・結婚、隣人・地域、労働から影響を受ける。このうち、所得と、関係性にかんする隣人・地域は、3-2で提示した暮らし向き、および、親しい人間関係で代替しうる。本項では、多変量解析で用いたそれ以外の変数、すなわち、健康、学歴、家族・結婚、労働と、基本属性にかんする変数について説明する。

健康は「現在の健康状態」について、1「よい」～5「よくない」の5段階から選択する質問を利用する。分析のさいには、1「よい」2「まあよい」を「よい」、3「ふつう」はそのまま、4「あまりよくない」5「よくない」を「よくない」の3カテゴリーに分け、「よい」を基準としたダミー変数を作成した。

学歴は、「最後に通った（通っている）学校」について、1「小・中学校」2「高校」3「短大・高専」4「大学・大学院」5「その他」の選択肢から特定した質問の回答を用いる。多変量解析のさいには、1「小・中学校」を基準として、他のカテゴリーのダミー変数を作成した。家族・結婚は、婚姻状況の質問を用いる。具体的には、「配偶者あり」を基準として、「死別」「未婚」「離別」のダミー変数を作成して分析に用いた。労働は現在の就業状態の質問を用いる。具体的には、「仕事をしている」を基準として、就業なし（求職中）、就業なし（求職なし）のカテゴリーのダミー変数を作成した。

上述の変数以外にも、基本属性として、性別と年齢の変数も作成した。性別は、男性 0、女性 1 とするダミー変数であり、年齢は実測値を用いている。

4 分析結果

4-1 関係性、経済的豊かさと不幸福感

表 2 は、関係性および経済的豊かさと、不幸福感との関連を分析したクロス表である。これを見ると、関係性については、喜び悲しみを分かち合う人が「いない」人、経済的豊かさについては、「恵まれない層」の精神状況が悪いことがわかる。

表2 関係性、経済的豊かさと気分が沈んで気が晴れない頻度

		いつも	たいてい	ときどき	少しだけ	まったく ない	N
喜び悲し みの分か ち合い	いる	1.8%	3.4%	16.3%	30.7%	47.8%	15633
	いない	8.1%	8.9%	26.3%	26.7%	30.0%	911
	頼らない	4.7%	4.7%	16.5%	23.1%	50.9%	528
	合計	2.2%	3.8%	16.9%	30.3%	46.9%	17072
暮らし向 き	豊かな層	1.5%	3.2%	12.1%	26.9%	56.3%	2006
	ふつう	1.4%	2.5%	14.3%	29.6%	52.3%	9859
	恵まれない層	4.0%	6.0%	22.6%	32.4%	35.1%	6103
	合計	2.3%	3.7%	16.8%	30.2%	46.9%	17968

喜び悲しみを分かち合う人が「いない」人、経済的に「恵まれない」人で、調査前月に「気分が沈み込んで、何が起ころうとも気が晴れない」と「いつも」「たいてい」感じた人は、それぞれ、17%、10%いる。それに対し、その他のカテゴリーで同様の感覚を「いつも」「たいてい」感じた人は、人間関係については5~9%、暮らし向きについては5%未満にとどまる。

一方、「気分が沈み込んで、何が起ころうとも気が晴れない」と「まったく」感じなかった人は、人間関係に恵まれない人、経済的に恵まれない人が顕著に少ない。また、喜び悲しみの分かち合いについて、「いる」人と「頼らない」人を比べると、「何が起ころうとも気が晴れない」と「まったく」感じない人は後者がわずかに多い一方、そうした感情を「いつも」「たいてい」抱いた人も、前者より多い。他者に頼らない人は不幸福感において二極化しているようである。

経済的豊かさについては、「何が起ころうとも気が晴れない」と「まったく」感じない人については、豊かさの順で増えるものの、「豊かな層」と「ふつう」の差は、あまり大きくない。また、当該感情を「いつも」「たいてい」抱く人は、豊かな層のほうがわずかに多い。ここからも、経済的豊かさと不幸福感は、単純な相関関係にないことがわかる。

4-2 関係性別にみる経済的豊かさと不幸福感の関連

次に、経済的豊かさと、不幸福感との関連を関係性別にみてみよう。表3は、暮らし向きと不幸福感との関連を、関係性のタイプ別に示したクロス表の結果である。

表3 関係性別にみた経済的豊かさと気分が沈んで気が晴れない頻度

		いつも	たいてい	ときどき	少しだけ	まったく ない	N
いる	豊かな層	2.8%	4.1%	18.7%	33.6%	40.8%	1839
	ふつう	2.4%	4.9%	21.7%	35.7%	35.3%	8642
	恵まれない層	5.5%	8.3%	28.4%	35.8%	22.1%	5071
	合計	3.4%	5.9%	23.5%	35.5%	31.6%	15552
いない	豊かな層	16.3%	10.2%	18.4%	24.5%	30.6%	49
	ふつう	6.3%	10.1%	29.6%	26.1%	28.0%	368
	恵まれない層	18.0%	14.9%	28.0%	26.7%	12.4%	490
	合計	13.1%	12.7%	28.1%	26.4%	19.7%	907
頼らない	豊かな層	15.6%	6.7%	24.4%	15.6%	37.8%	45
	ふつう	3.2%	7.8%	19.2%	29.2%	40.6%	281
	恵まれない層	14.5%	8.5%	31.5%	18.0%	27.5%	200
	合計	8.6%	8.0%	24.3%	23.8%	35.4%	526

この表を見ると、経済的豊かさと不幸福感の関連は、諸個人の間関係の状況によりかなり異なることがわかる。しかも、その傾向は、負の相乗効果、アノミー効果を支持している。

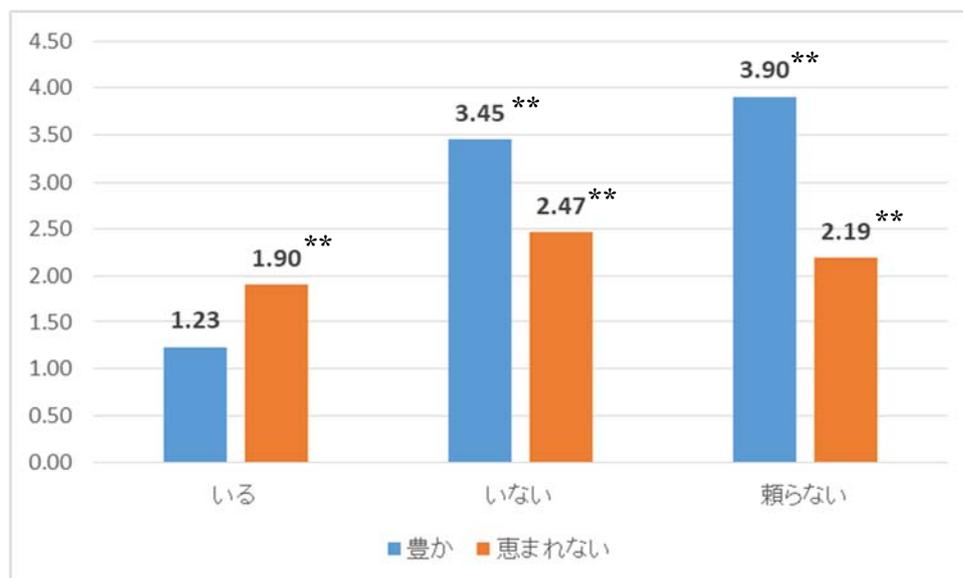
喜び悲しみを分かち合う人が「いる」層については、「気分が沈み込んで、何が起っても気が晴れない」と「いつも」感じる人についてのみ、「豊かな層」と「ふつう」の数値がわずかに逆転しているものの、「たいてい」「ときどき」「少しだけ」のカテゴリーでは、経済的に恵まれない層ほど、「気分が晴れない」感覚を抱く人が増えてゆく。一方、そうした感覚が「まったくない」人は、豊かな層ほど多くなっている。

一方、喜び悲しみを分かち合う人が「いない」層は、複雑な動きを示す。「気分が沈み込んで、何が起っても気が晴れない」と「まったく」感じない人は、経済的豊かさの順に増えてゆく。とはいえ、豊かな層とふつうの間の差は小さい。他方、何が起っても気が晴れないと「いつも」感じている人は、恵まれない層と豊かな層がふつうの人に比べ格段に多い。同様の感覚を「たいてい」感じている人も、恵まれない層で多く、次に、豊かな層がふつうをわずかに上回る。つまり、喜び悲しみを分かち合う人が「いない」人については、経済的に恵まれない層、豊かな層いずれも、精神的には不幸な状態の人が多いのである。

さらに注目すべきは、喜び悲しみの分かち合いについて、「頼らない」人である。表2から、この層の不幸福感は二極化していると考えられた。そこで、暮らし向きに応じて、対象を分類すると、経済的に豊かな層と恵まれない層に、精神的に不幸な状態の人が顕著に多いことが明らかになった。「気分が沈み込んで、何が起っても気が晴れない」と「いつも」感じている人は、両層では、「ふつう」の人に比べ、10%ポイント以上多い。ここから、自らの意思で親しい関係をもたない人びとについても、関係性と貧しさによる負の相乗効果、アノミー効果いずれもがみられることが明らかになった。

4-3 多変量解析の結果

次に、多変量解析を用いて、諸変数の効果を統制しても、関係性と貧しさによる負の相乗効果、アノミー効果がみられるかどうか確認してみよう。



注：数値はオッズ比を表しており、数値の横の**は1%水準で有意な結果であることを表している。

図1 ロジスティック回帰分析の結果（経済的豊かさのオッズ比のみ）

図1は、諸個人のメンタルヘルスでみる不幸福感、すなわち、「気分が沈み込んで、何が起ころうとも気が晴れない」と「いつも」または「たいてい」感じているかどうかを、従属変数としたロジスティック回帰分析の結果である。図は注目点のみ抜粋している。具体的には、経済的豊かさが「ふつう」の人に比べ、「豊か」な人、「恵まれない」人の不幸福感がどのくらい高まるのかのみ示している。数値はオッズ比であり、数値の横の印は、有意水準を1%として、統計的に有意であることを示している。なお、分析結果の詳細は、本文の後の「資料」に掲載している。

これをみると、経済的豊かさと精神的な不幸福感については、仮説どおりの関連がみられることがわかる。さらに、喜び悲しみを分かち合う相手が「いない」人のみならず、自発的に「頼らない」人にも、同様の効果がみられている。以下、詳しく検討しよう。

まず、経済的に恵まれない層のオッズ比に着目すると、喜び悲しみを分かち合う相手が「いる」人、「いない」人、そうした関係を欲しない人いずれも統計的に有意であり、しかも、「ふつう」の人に比べ、「恵まれない」人ほど、不幸福感を感じやすいという結果になっている。つまり、経済的な貧困は、関係性にかかわらず、人びとの精神的な不幸福感を高めるのである。

経済的に恵まれない層のオッズ比について、さらに詳細にみると、喜び悲しみを分かち合う相手が「いる」人が1.90、「いない」人が2.47、「頼らない」人が2.19となっている。ここから、喜び悲しみを分かち合う相手が「いない」人ほど、経済的な貧しさが彼・彼女の精神的な不幸福感を高めることがわかる。また、「頼らない」人についても、「いる」人よりも、マイナス効果が大きい。したがって、親しい関係の欠損と経済的な貧しさは、諸個人の不幸福感をより強くする負の相乗効果をもつと言えよう。しかも、その効果は、親しい関係を“もて

ない”人のみならず、自発的に“もとうとしない”人にも現れる。

次に、豊かな層のオッズ比を確認しよう。豊かな層については、喜び悲しみを分かち合う相手が「いない」人、そうした関係を欲しない人のみが有意であり、しかも、その数値は、喜び悲しみを分かち合う相手が「いない」人、そうした関係を欲しない人ほど、精神的な不幸感を感じやすい結果になっている。喜び悲しみを分かち合う相手が「いる」人については、有意な効果はみられない。以上の結果から、経済的に豊かであっても、親しい関係に乏しいと、その剥奪感から不幸感が高まるアノミー効果がみられると言える。

詳しい数値についても興味深い。喜び悲しみを分かち合う相手が「いない」人のオッズ比は、3.45、「頼らない」人のオッズ比は、3.90となっている。つまり、富裕層の関係欠損により生じるアノミー効果は、貧困層の相乗効果よりも強いのである。同時に、その効果は、関係が「ない」人よりも、「頼らない」人のほうが強い。言い換えると、関係をもとうとしない人に、アノミー効果はもっとも強く現れるのである。この点は非常に興味深いので結論部分で再度議論しよう。

喜び悲しみを分かち合う相手が「いる」人のオッズ比は、有意ではないものの、1.23 とプラス方向になっている。ここから、諸変数を統制すると、経済レベルにおいて「ふつう」の人に比べて、「豊か」な人の精神的な不幸感が低くなるわけではないと言える。つまり、「ふつう」以上の経済レベルの上昇は、精神的な不幸感の低減に役立たないのである。

5 結論と考察

5-1 これまでの分析結果

本研究は、経済的豊かさと幸福との関連について、親しい関係の有無が影響を与えると考え、喜び悲しみを分かち合う相手の「いる」人、「いない」人、欲しない人別に、経済的豊かさと不幸感との関連を分析した。その結果、以下の5つの知見が得られた。

1)親しい関係の欠損と経済的な貧しさは、諸個人の不幸感をより強くする負の相乗効果をもつ、2)経済的に豊かであっても、親しい関係に乏しいと、関係性の剥奪感から不幸感が高まるアノミー効果がみられる、3)負の相乗効果とアノミー効果は、関係性を「もてない」人のみならず、自発的に「もとうとしない」人にも現れる、4)負の相乗効果とアノミー効果の大きさを比べると、アノミー効果のほうが大きい、5)アノミー効果は、親しい関係を自発的に「もとうとしない」人のほうが大きい。

以下では、本研究の結びとして、これらの知見から得られる示唆について、検討しよう。

5-2 経済的豊かさと幸福（不幸）感の複雑な関係——1)、2)、3)

経済的な豊かさと幸福（不幸）感に単純な相関が見られないことは、さまざまな研究で指摘されていた。なかでも、家族などの親しい人間関係の充実は、相対的に所得の低い人の剥奪感を和らげると言われている。しかし、誰もが人間関係をよいものとするわけではない。本論文の知見は、親しい人間関係は、かりに、それが失われたとき、あるいは構築的できないときに、経済的に豊かな人、恵まれない人それぞれの剥奪感を高め、不幸な感覚を増すことを明らかにした。

経済的に恵まれない層については、経済的に恵まれないうえに、人間関係にも恵まれない、

という不幸の相乗効果から、不幸福感がますます高まる。他方、経済的に豊かな人については、経済的に恵まれているにもかかわらず、人間関係には恵まれないという剥奪感から、不幸福感を高めてしまう。かくして、親しい関係性に恵まれない人は、かりに、経済的に豊かになっても、貧困層に転落しても、結果して不幸福感を高めてしまう。したがって、諸個人の経済的な豊かさと幸福感の関連は、当該個人の人間関係の実情に影響されると言えよう。

しかも、親しい関係を欠くことによる影響は、それが望まないものであれ、意図したものであれみられていた。本研究では、親しい関係の欠損を、そうした関係のいない人と、そうした関係を作ろうとしない人に分けて分析した。その結果、親しい関係のいない人、つくろうとしない人、いずれについても、負の相乗効果とアノミー効果がみられた。この結果は、自己決定を重視する現代社会の病理性を表している。そこで、次項では、より詳細な結果を踏まえて、経済的な豊かさと幸福について検討しよう。

5-3 経済的な達成を追求する社会への警鐘——4)、5)

親しい関係を欠損した人の経済的豊かさと不幸福感の関連を検討すると、経済的に恵まれない層よりも、豊かな層のほうが、精神的に不幸になりがちであった。また、その傾向は、親しい関係のいない人よりも、そうした関係を作ろうとしない人に強くみられた。つまり、経済的に恵まれているにもかかわらず、親しい関係（喜びや悲しみを分かち合う関係）を作ろうとしない人ほど、「気分が沈み込んで、何が起こっても気が晴れない」と「いつも」または「たいてい」感じている傾向が強いのである。ここから、現代社会の病理を読み取ることができる。

経済的な豊かさの達成は、私たちの人生目標の一つととらえられている。しかしながら、経済的な豊かさの追求が、温かい人間関係の放擲につながるという指摘は、実証的な根拠に乏しいものの、資本主義経済システムを批判する数多くの論者によって唱えられてきた。近代資本主義的な生活様式が浸透しだした 19 世紀の思想家の議論（Marx 1848=1951, Tönnies 1887=1973 など）、近年でいえば、脱成長を強調する思想家の議論（Latouche 2004=2010; 西川 2011）は、その典型である。

とはいえ、実際に、実証研究の成果を確認してみると、経済的豊かさと人間関係については、豊かな人ほど人間関係にも恵まれる、という結果でほぼ一致している（Fischer 1982=2002; 原田 2017; 石田 2018）。表 3 から、経済的に恵まれているにもかかわらず親しい関係をもととしない、あるいは、もてない人の数を計算すると、わずか 94 人であり、比率でいえば 0.55% にすぎない。ここから、本研究の結果は、かなり限られたケースにのみ当てはまるものであり、あまり意識しなくてもよい、とも考えられる。しかしながら、その結果を過少に評価することも禁物である。

同じデータで、喜び悲しみを分かち合う相手が「いない」人、「頼らない」人の背景を探ると、単身か否かが非常に重要だ、という結果になる。周知のように、日本社会において、単身で生活する人は着実に増えており、今後も増えゆくことはほぼ間違いない。単身者の増加は、親しい関係をもち得ない人びとが増えてゆく社会の到来を予感させる。

他方、私たちが、近代資本主義経済システムのなかで生きていく以上、経済的な豊かさの達成を、人生目標の重要な一部に据える姿勢は変わらないだろう。個人化し、自己責任の論理が浸透する社会において、人びとは生活の糧を充足する責務を果たすべく、経済競争への

没入をよりいっそう強く求められる。

筒井 (2010) は、過度な経済欲求の追求が幸福感を減じることを明らかにした。本研究では、親しい関係を“もてない人”よりも“もとうとしない人”に、不幸福感がより強まっている事実が明らかにされた。ここから、関係性を省みず、経済的な豊かさを追求することの負の帰結が想起される。

個人化した社会では、自己責任の原理が適用されやすく、人びとは自らの人生を独力で組み立てよう仕向けられる。言い換えると、自らの身を支えうる経済力を得よう駆り立てられるのである。このような社会では、今後ますます、不幸福感を高める人が増えてゆく可能性もある。競争を勝ち抜いたものの、周りに親しい人はなく、不幸福感を拡大させる。本研究の結果は、進歩と成長を追求した競争の果ての「暗い未来」を映し出しているのであるⁱⁱ。

5-4 今後の課題

最後に今後の課題についても指摘しておこう。幸福感の分析は、その指標の多様性ゆえに、指標を変えると異なった結果がみられる、ということも多い。分析結果の揺らぎは本論文の結果においても見られる可能性がある。

本論文では、「気分が沈み込んで、何が起こっても気が晴れないように感じた」という質問への回答を不幸福感とした。2017年の『生活と支え合いに関する調査』には、今回用いた意外にも、「何かに絶望的だと感じた」「自分は価値のない人間だと感じた」という質問への回答もある。これらを仮に「不幸福感」として同様の分析を行っても、ほぼ同様の結果が得られている。したがって、本研究の結果は、あるていど頑健なものと言えよう。

しかしながら、2012年のデータを用いて同様の分析を行うと、本論文と同じ傾向がみられるものの、ここまで明確な結果は得られない。これが経年変化によるものか、それとも、質問文・質問形式の変更によるものか、どちらかに統計上の誤差が反映されたものかはわからない。したがって、追加分析をつうじて、結果の信頼性を高める必要がある。それにより、人間関係、経済、幸福の関わりは、よりいっそう明瞭になるはずである。

資料

表4 メンタルヘルスの悪さを従属変数としたロジスティック回帰分析の結果

	いる					いない					そのことでは人に頼らない				
	B	S.E.	Wald	d.f.	Exp(B) p	B	S.E.	Wald	d.f.	Exp(B) p	B	S.E.	Wald	d.f.	Exp(B) p
性別 (女性=1)	0.15	0.08	3.00	1	1.16	0.33	0.23	2.09	1	1.40	0.08	0.39	0.04	1	1.09
年齢	-0.04	0.00	138.72	1	0.96 **	-0.05	0.01	39.79	1	0.95 **	-0.08	0.02	27.41	1	0.93 **
学歴 (小中学校基準)			3.58	4				2.17	4				2.82	4	
高校	-0.19	0.14	1.76	1	0.83	-0.40	0.31	1.66	1	0.67	-0.18	0.71	0.06	1	0.84
短大・高専	-0.25	0.18	1.94	1	0.78	-0.50	0.54	0.86	1	0.60	0.65	0.86	0.57	1	1.91
大学・大学院	-0.23	0.16	1.99	1	0.80	-0.19	0.35	0.30	1	0.82	-0.38	0.72	0.28	1	0.68
その他	-0.33	0.18	3.36	1	0.72	-0.37	0.41	0.81	1	0.69	0.08	0.80	0.01	1	1.08
婚姻形態 (既婚基準)			10.35	3	*			1.30	3				4.26	3	
死別	0.32	0.18	3.03	1	1.37	0.31	0.42	0.55	1	1.36	1.25	0.79	2.49	1	3.48
未婚	0.04	0.11	0.11	1	1.04	-0.06	0.27	0.05	1	0.94	-0.47	0.45	1.09	1	0.63
離別	0.43	0.15	8.24	1	1.53 **	-0.23	0.35	0.44	1	0.80	-0.65	0.82	0.63	1	0.52
就業状況 (就業基準)			0.75	2				3.73	2				1.19	2	
就業なし (求職中)	0.06	0.15	0.16	1	1.06	0.38	0.32	1.45	1	1.46	0.55	0.54	1.05	1	1.74
就業なし (求職なし)	-0.07	0.10	0.43	1	0.94	0.46	0.26	3.25	1	1.59	0.27	0.42	0.41	1	1.31
暮らし向き (ふつう基準)			57.72	2	**			15.83	2	**			7.51	2	*
豊かな層	0.21	0.14	2.22	1	1.23	1.24	0.46	7.20	1	3.45 **	1.36	0.55	6.16	1	3.90 *
恵まれない層	0.64	0.09	57.06	1	1.90 **	0.90	0.25	13.27	1	2.47 **	0.78	0.39	4.02	1	2.19 *
健康状態 (よい基準)			508.36	2	**			34.92	2	**			13.54	2	**
ふつう	0.70	0.10	45.43	1	2.01 **	0.47	0.30	2.43	1	1.59	0.84	0.42	4.03	1	2.31 *
よくない	2.32	0.11	457.56	1	10.15 **	1.63	0.31	27.33	1	5.11 **	1.77	0.48	13.53	1	5.89 **
定数	-2.07	0.25	70.17	1	0.13 **	-0.25	0.63	0.16	1	0.78	0.27	1.06	0.07	1	1.31
カイ2乗	746.51			15	**	123.91			15	**	62.52			15	**
Nagelkerke R2 乗	0.15					0.23					0.25				
N	14582					828					496				

- Cacioppo, John T., and William Patrick, 2008, *Loneliness: Human Nature and the Need for Social Connection*, Massachusetts: The Garamond Agency. (=2010, 柴田裕之訳『孤独の科学——人はなぜ寂しくなるのか』河出書房新社.)
- Durkheim, Émile, 1960, *Le Suicide: Étude de Sociologie*, Paris: Presses Universitaires de France. (=1980, 宮島喬訳『自殺論 (世界の名著 58)』中央公論社.)
- Easterlin, R., 1974, “Does Economic Growth Improve the Human Lost? Some Empirical Evidence” David, P A., and M. W. Reder eds., *Nations and Households in Ecomic Growth: Essays in Honor of Moses Abramovitz*, New York: Academic Press, 89-125.
- Fischer, Claude S., 1982, *To Dwell among Friends: Personal Networks in Town and City*, Chicago: The University of Chicago Press. (=2002, 松本康・前田尚子訳『友人のあいだで暮らす——北カリフォルニアのパーソナル・ネットワーク』未来社.)
- 古里由香里・佐藤嘉倫, 2014, 「主観的幸福感とソーシャル・キャピタル——地域の格差が及ぼす影響の分析」辻竜平・佐藤嘉倫『ソーシャル・キャピタルと格差社会——幸福の計量社会学』東京大学出版会, 189-208.
- 原田謙, 2017, 『社会的ネットワークと幸福——計量社会学でみる人間関係』勁草書房.
- 石田光規, 2018, 『孤立不安社会——つながりの格差、承認の追求、ぼっちの恐怖』勁草書房.
- 石川善樹, 2014, 『友だちの数で寿命はきまる——人との「つながり」が最高の健康法』マガジンハウス.
- 小林盾・カローラ・ホメリヒ・見田朱子, 2015, 「なぜ幸福と満足は一致しないのか——社会意識への合理的選択アプローチ」『成蹊大学文学部紀要』50: 87-99.
- 国立社会保障・人口問題研究所, 2017, 『2017年社会保障・人口問題基本調査 生活と支え合いに関する調査 結果の概要』国立社会保障・人口問題研究所.
(<http://www.ipss.go.jp/ss-seikatsu/j/2017/seikatsu2017summary.pdf> 2020年3月16日検索)
- 近藤克則, 2010, 「幸福・健康の決定要因——社会疫学の視点から」『科学』80(3): 290-4
- Latouche, Serge, 2004, *Survivre au développement: de la decolonization de l'imaginaire économique à la construction d'une société alternative*, Paris: Mille et une nuits. (=2010, 中野佳裕訳「<ポスト開発>という経済思想」『経済成長なき社会発展は可能か?——<脱成長>と<ポスト開発>の経済学』作品社, 21-126.)
- Marx, Karl, und Friedrich Engels, 1848, *Das Kommunistische Manifest*. (=1951, 大内兵衛・向坂逸郎訳『共産党宣言』岩波文庫.)
- Meadows, Donella, Dennis L. Meadows, Jergen Randers, and William W. Behrens III, 1972, *The Limits to Growth: A Report for the Club of Rome's Project on the Predicament of Mankind*, New York: Universe Books. (=1972, 大来佐武郎監訳『成長の限界—ローマ・クラブ「人類の危機」レポート』ダイヤモンド社)
- 西川潤, 2011, 『グローバル化を超えて——脱成長期日本の選択』日本経済新聞出版社.
- 大石繁宏, 2009, 『幸せを科学する——心理学からわかったこと』新曜社.
- Tönnies, Ferdinand, 1887, *Gemeinschaft und Gesellschaft*, Darmstadt:

- Wissenschaftliche Buchgesellschaft. (=1973, 杉之原寿一訳『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト 上・下——純粹社会学の基本概念』岩波文庫.)
- 筒井義郎, 2010, 「なぜあなたは不幸なのか」大竹文雄・白石小百合・筒井義郎編『日本の幸福度——格差・労働・家族』日本評論社, 33-73.
- 浦光博, 1992, 『支えあう人と人——ソーシャル・サポートの社会心理学』サイエンス社.
- 浦川邦夫, 2011, 「幸福度研究の現状——将来不安への処方箋」『日本労働研究雑誌』612: 4-15.
- 浦川邦夫・松浦司, 2007, 「相対的格差が生活満足度に与える影響——「消費生活に関するパネル調査」による分析」『季刊 家計経済研究』73: 61-70
- 脇田彩, 2017, 「地域の階層格差と生活満足度」『年報社会学論集』30: 98-109.

i それぞれの指標の表すものは、厳密に言えば異なる。たとえば、小林ほか(2015)は、幸福感と生活満足との違いを指摘している。しかし、本論文では、幸福感のなかの細かな概念の差異には立ち入らない。

ii それとは反対に、競争に敗れ去り、関係性も構築できず不快感を募らせる人びと、すなわち、負の相乗効果に悩まされる人びとの存在も忘れてはならない。個人化が進むなかでの競争の拡大は、結果して、経済にも関係にも恵まれない人を増やしてしまうのである。